

草生する成べし、水深く水流る、所には草の生ずる事なきがごとし、まかれば心火有餘、心血乾燥して、此症をなす成べし、心火を瀉して後、心血を増ときは、其病愈べし、阿部氏に命じて治せしむ、竹葉石膏湯に當歸芍藥麥門冬、黃連、連翹を加へて、これを服せしむ、朱砂安神丸を兼服す、二十餘貼にして、舌上の毛ことごとくぬけて、舌の乾燥太半を減す、後に逍遙散に、山梔子、麥門冬、酒製の芩連、連翹を加へ、數貼を服してその病愈たり、此病を以これを考れば、土あつて少く、水の潤澤ある所には草よく生じ、氣血のとゞまつて濡潤なる所に毛を生ずるの義と知べし、此醫按子があらはすと、ころの遊豐司命錄に載たり、其義詳也、考へ見て、まるべきなり、

〔生生堂治驗〕一老婆有奇疾、每見人面皆有疣贅、更醫治之也、不可勝數、然無寸効、先生○中神診之、脈弦急、心下滿、服之三聖散八分、令吐、後與柴胡加龍骨牡蠣湯、自是不復發、時年七十許、

〔生生堂治驗〕近江大津人某、來見先生○中神、屏人竊言曰、小人有一女、年甫十六、既許嫁、然而有奇疾、其證非所嘗聞者也、蓋每夜及丑首及家人熟睡、竊起舞躍、其舞清妙閑雅、宛然似才妓最秀者、至寅尾而罷、遂寢、以爲常、余間窺之、夜夜輒異其曲、曲從變奇、不可名狀、明朝動止、食飲無以異常、亦不自知其故、爲告之、則愕然而怪、竟不信也、不知是鬼所憑乎、若狐狸所惑耶、他若聞之、恐害其婚、是以爲之陰祝、呪禱祀無不爲也、然不効、聞先生之門多奇疾、幸來視、先生應曰、此證蓋有之、卽所謂狐惑病者、行診之、果然、與之甘草瀉心湯、不數日而夜舞自止、遂嫁某氏、而有子、

婦人病  
月水不調

〔醫心方二十三〕治產後月水不調方第卅八

病源論云、產傷動血、氣虛損未復、而風邪冷熱之氣、客於經絡、乍冷乍熱、冷則血結、熱則血消、故令血或多或少、乍在月前、或在月後、爲不調也、

〔覆載萬安方〕通治婦人血疾經血暴下、暴下血故名曰崩中、如山頽落、謂之崩倒也、此中婦人通用之總藥也、

〔五體身分集〕開陰病分